

ともはつよし社

天使になった
大統領

1

小説の仮面をかぶった
「真実」の物語 遂に明かされる
「最高権力者」の裏側

ともはつよし社

装丁 takakadesign
本文仮名書体 文麗仮名(キャップス)

プロローグ	遺書	5
第一章	そのドアが今、開かれた	13
第二章	姉と弟	23
第三章	生い立ち	33
第四章	結婚	77
第五章	信念	113
第六章	我が子	205

ともはつよし社

プロローグ

遺書

親愛なるジャクリーヌ

さて、何から始めようか。あまりに気恥ずかしくて、気のきいた言葉は浮かばない。

とにかく、父と娘の間柄でありながら、誰よりも遠い関係だった私から、突然こんなふうの手紙をもらって、君はさぞかし驚いているだろうね。何しろ、君に宛てて書く初めての手紙なのだから。しかも、最後の手紙でもあるのだ。

明日、つまり、君がこの手紙を私の使いから受け取るであろう、二〇〇二年四月十日、私はこの世を去らなければならぬ。

病死や事故死や自殺……。

誰かがそのように見せかけるとしても、真相は別のところにある。一言でいえば、『消される』のだ。君がその証人になってくれるだろうか。

明日は世界サミットだ。来るべき時が来たのだ。明日は、波瀾に満ちた私の人生の最後の正念場であると同時に、殺戮と利権争いをくり返してきた人類の歴史の分岐点となる日になるだろう。人類が共存してゆくか、自滅するかを世界レベルで選択する、新たな一歩が踏み出されるのだ。

とにかく、私は逃げない。

アメリカ大統領としてではなく、一人の人間、ジル・ニコルソンとして、ベストを尽くすつもりだ。

私が一度、逃げようとしたのは、君も知っているだろう。そう、二十一世紀到来のカウントダウンの最中のことだった。

あの日、私はほんの一瞬の間に、永遠と思えるほどの長い旅をした。その結果、悟りを得たのだ。この世に悲劇の種をまく為に産声をあげたような男である私の、本当の使命というものを。

以来、ホワイトハウスの連中は、私の頭がおかしくなったと思っただけなのだとね。しかし、私は断言する。それは違うのだと。私はただ、やっと本来の私自身になっただけなのだとね。

ジャクリーヌ、君に大切な頼みがある。ここに同封したノートの中身を世間に、いや、全世界中の人々に公表してくれないか。これは、君への、そして、人類への大きなプレゼントなのだ。これは、人間としてこの世に生まれてきた者たち全てに例外なく益となる、永遠不滅の物語、魂の物語なのだから。

私の半生記である前半はともかく、後半になると、内容があまりにも超次元なので、私の作り話だと決めつけたくなくなるかもしれない。だが、ジャクリーヌ、激務を縫って、部屋に閉じこもって書いてきたこの壮大な物語はすべて真実であり、私を通じて全人類の心の叫びと願いが総集されたものだという確信がある。もとはといえば、故郷の街の文房具屋の隅で埃をかぶっていた、十五ドル二十五セントの茶色いカバーのたかがノートなのだがね。

ジャクリーヌ、このノートをなぜ君に託そうとするのか、君は疑問に思うかも知れない。世間のイメージとは裏腹に、君と君の母さんに対して、私は限りなく無関心に近かった。サンドラが君を

シンデレラのように仕立てようとしてきたことにも、私は結局何も言わなかった。嫌な響きだが、私にはどうすることもできなかった。今さら弁解めいた事を言っつて、君の憐憫の情をくすぐるようなどという的外れな野心はないが、ついでに言わせてもらえれば、きつと、私は孤独すぎたのかもしれない。薄情な父親だと、さぞかし、君は私を憎んでいることだろうね。

それでも、やはり、最後には君しかいないんだよ、ジャクリーヌ。私とサンドラが仮面夫婦であったとしても、その間に生まれた君は、私にとっては、ノートを託せるただ一人の家族なのだから。私の身勝手をどうか許してくれたまえ。

白状すると、実は、君には腹違いの弟がいる。覚えているだろう、全米を騒がせた『アンディー』という少年を。あの子だよ。あの事件の後、行方が判らなくなった彼を随分捜しまわったのだが……。

やっと突き止めた住所に、一度訪ねていったことがあるが、彼と顔を合わせる勇気は最後まで出てこなかった。それだけが、今は心残りだ。

「弟の将来を見届けてほしい」と、もし私が頼んだとすると、君はどんな顔をするだろうか。あまりの厚顔無恥さに、笑い出してしまうだろうか。それとも、怒りにまかせて、ノートを焼き捨ててしまい、自分の境遇を嘆くのだろうか。まあ、念のために、アンディーの住所と、彼が幼い時に一枚だけ一緒に撮った写真を同封しておくでしょう。

最後まで、きちんとした自己反省とは無縁らしいな、私って男は。思うに、自らの信念に絶対的信仰を置き、決してそれを疑わない正義の自信家ほど、正しい自己反省は難しいのだよ。

体を八つ裂きにされても屈しない鉄の信念は、美しい。しかし、その後ろ姿に反射する影は、やけに独裁者のそれと似てしまう。本来、独裁者ほど、純粋な信念の持ち主はないということになるのかな。

人の世に起こる出来事の全ての明暗と、その根底に流れる、人間が人間たる由縁の純粋さ。それらをどう理解するのか。はたして、それは理解できうるものなのか。いかなる哲学者も、今だに答えを見出せないでいるが、一つだけ言えるとすれば、人間がその心の奥底に咎を持っているからこそ、その『純粋さ』は、救いを求めて、理想と邪悪なる正義を追求しようと試みるのではないだろうか。

邪悪なる純粋さか、あるいは、純粋なる邪悪か……。

それは永遠の問だが、邪悪なる世界に突入しなければ、純粋なる世界に到達することができない現実こそが、さらに、その相反する二つの世界の摩擦によって生じる犠牲こそが、人間が存在してゆく最大の悲しみだなのだと、私は思う。

私の場合もそうだが、純粋さこそ、人の世の悲劇の源泉ではないだろうか。

あの世に行って、地獄を散歩することがあったら、ぜひ教えてやろう。この純粋さの悲劇というやつを。マルクスやヘーゲルに、おそらく自己反省とは無縁だったであろうエリザベス一世、始皇

帝、カリギユラ、アレキサンダー大王、ついでに守銭奴のネイソン・ロスチャイルドや、死の商人ザハロフたちにもな。

私は今、世界サミットの宿舎であるホテルのスウィートルームにいる。あの二〇〇〇年の大晦日にサンドラと過ごした思い出深い部屋だ。見慣れたニューヨークの摩天楼が、今夜はやけに美しく見えるよ。それが、なんだか無性にも悲しい。

もう一つ心残りがあるとすれば、この日を迎える前に、中近東を旅してみたかったということだ。現役の大統領をやっていると、それはとても無理な相談だったが、エジプトからシナイ砂漠を歩き、懐かしきイスラエルを通り、トルコを横切って、そこからイタリアまで続く道をジープでも運転しながら旅を試してみたかったよ。もちろん、ボディガードや側近なしの気ままな一人旅だが、この年になって洒落でもないと思うかね？

だがね、なぜか最後の最後で、私の心を吸い寄せるものは、目の前のまばゆい摩天楼ではない。故郷の静寂深き森でもない。それは、砂漠に吹きすさぶ無常の風なのだよ。

あれだけ憎んだ砂漠を、この世での最後の瞬間に恋しがらだなんて、まるで皮肉なものだがね……。

もし君が了承してくれるならば、私を狭い墓石に閉じ込めて、故郷の地に埋めないうで、火葬にしてほしい。そして、灰となった私をエルサレムの神殿にまいてほしいのだ。神殿といっても二千

年前の話で、今では『嘆きの壁』になってしまったがね。イスラエルの風に吹かれて、きれいさっぱり消え去るほうが性に合っているのだよ。

ジャクリーヌ、多くの人は、本当の幸せというものを勘違いしている。人は幸せになるのに、何もしゃくもないのだ。金も、物も、地位も、保険も、何も要らない。これがあれば幸せ、ここに行けば幸せというものもない。

魂が本当に求めるものは、すべて既に自分の心の深淵に存在しているのだ。問題は、それをいかに見出せるかどうかだけなのだよ。その見出し方は各々違うが、それを見出す旅が、すなわち人生であり、そのプロセス自体が、清泥にまみれた、この愚かな世を『人間として生きる』という事だ。そして、私は今とても幸せだ。

生と死が何であれ、私は感謝する。存在というはかり知れない摩訶不思議に、生命という途方もない冒険に。さあ、乾杯だ。人生に乾杯。これが私が味わう最後のワインだな。ワイングラスの赤色の向こうで摩天楼が笑っているよ。

ああ、なんとという軽やかさだろう。最高の気分だよ。私は自由自在な天使になったのだ。自分の心の中に神が共におられることが実感できる。これ以上、何を望むことがあるだろうか……。

君と、世界の全ての人々の心に、神の臨在と平安があるように、私は祈ってやまない。最後になつてしまったが、君に言いたくても、ずっと言えなかった言葉を贈る。

ともはつよし社

愛してるよ、ジャクリーヌ。君に本当の幸よ、あれ！

二〇〇二年四月九日

ジル・ニコルソン

第一章

そのドアが、今、開かれた